

平成二十一年度 入学試験問題

国 語

第一回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。(八時五〇分～九時四〇分)
- 一、問題は一ページから六ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

さまざまな商品は、「需要と供給」の関係で、ネダンが決まっています。片方に「需要」があると、もう片方に「供給」がある。そこには、「買う人」と「作る人」というヤクワリ分担が存在します。

つまり、一人がすべてを製造するのではなく、人々が分業してさまざまな商品を作り、それを「交換」しています。「需要と供給」は、分業・交換を前提にしているのです。

たとえば大昔、海岸に住む漁師と、山で猟師をしている人がいたと考えてみましょう。漁師は、毎日魚を獲って食べています。でも、たまには、魚以外のものも食べたくなるでしょう。山で獲れたイノシシの肉を食べたくなつたとします。

一方、山の猟師も、いつも動物の肉ばかりでは飽きてきます。魚も食べたくなるでしょう。こういうとき、互いに魚と肉を持ち寄って物々交換をすれば、互いにとってコウフクです。漁師は漁の専門家、猟師は狩りの専門家です。漁師が魚もイノシシも獲るより、互いに自分の得意な分野の仕事をして、獲物を交換した方が、ずっと効率がよくなります。

これが分業であり、交換です。私たちは、分業と交換をすることで、すべてを一人で担当するより、ずっと豊かになることができました。

あなたの日常生活のことを考えてみましょう。あなたが着ている服、はいている靴、食べている食べ物。これらみんな自分一人で作るとしたら、大変です。毎日毎日、食べ物を探し、調理し、服をシユウリし、ということをやっていたら、他のことは何もできなくなりそうです。分業して出来たものを交換することで、私たちはゆとりある暮らしができています。

分業や交換をする能力のない動物たちが、日々の食べ物を追い求めている様子を見れば、人間がなぜ豊かな生活ができるようになったかがわかります。

交換することによって私たちは豊かになることができましたのですが、大昔の物々交換は、実はとても大変なことだったので。

魚を持っている漁師が、イノシシの肉を持っている猟師と、魚と肉を交換することを想像してみてください。魚を肉に交換したいと思っっている漁師がいても、「肉を魚に交換したい」と思っっている猟師に出会うことは、なかなかあることはありません。

そもそも二人がバッタリ出会う偶然は考えられませんし、たまたま肉を持つている猟師と会えたとしても、猟師は肉を果物と交換したいと思っっているかも知れないからです。

そこで、物々交換したい人たちが、広場に集まってくるようになります。これが市の始まりです。

しかし、魚を持っている人が、肉を持っている人を探しているうちに、魚が腐ってしまうかも知れませんか。とりあえず長持ちするものに替えておいた方がいいということになります。その長持ちするものは、みんなが欲しがるものがありますね。それに交換しておけば、いつでも他のものと再び交換することができるからです。

こうして、「みんなが欲しがり、長持ちするもの」が選ばれます。これが、「お金」です。お金とは、交換の仲立ちをするものなのです。

長持ちするものとしては、どんなものでもいいでしょうか。古代の中国では、貝が使われました。海から離れた内陸部では、きれいな貝を簡単に手に入れることはできません。貴重なのですね。そこで、この貴重な貝がお金の働きをするようになりました。

人々は、自分が作ったものをいったん貝に換え、この貝で、欲しいものと交換するのです。貝がお金として使われていた証拠が、私たちが使っている漢字に残っています。漢字は中国から伝わりました。お金に関する漢字には、「貝」が使われているのです。

買、貴、貯、財、資、貧など、みんな「貝」という文字が入っているでしょう。

しかし、やがて金や銀、銅などの金属がお金として使われるようになりました。金属なら落としても壊れませんし、腐ることもありません。熱を加えれば加工も簡単です。持ち運びにも便利です。

金、銀、銅の中では、やはり見た目が美しい金がよく使われるようになっていきました。金貨の誕生です。

金や銀は、熱して鑄型に入れることで、自由な形にすることができます。いろいろな大きさの金貨や銀貨に加工することができます。この結果、世界各地で、金貨や銀貨が使われるようになりました。

他人が欲しがるものを製造したり、獲ってきたりすることで、金貨や銀貨に替える。すると、その金貨や銀貨を使って、自分が欲しいものと交換できる。

お金が生まれたことで、私たちは分業ができるようになり、欲しいものと交換することで、豊かな暮らしを実現するようになったのです。同時に、「需要と供給」の関係が成立しました。

ところが、商取引が活発になり、大金が動くようになりますと、金貨や銀貨では不便になってきます。高い商品を買うときには、金貨を大量に運ばなければならぬからです。一人では運べない重さになるかも知れません。ガチャガチャ音がする重い金貨を大量に運んでいると、途中で強盗に襲われる危険もあります。そこで、お金持ちの両替商に金貨を預け、代わりに「預かり証」を発行してもらおう、という方法が生まれました。

商取引の際には、金貨を渡さずに、預かり証を渡すのです。預かり証を受け取った人は、それを両替商に持っていけば、預かり証に書かれている金額の金貨を受け取ることができます。

預かり証なら畳んでしまふことができますから、一人で運べますし、強盗にも気づかれることはありません。

両替商はお金持ちですから、「預かり証を持っていけば、必ず金貨と交換してもらえ」という信用があります。両替商に対する信用によって、預かり証が、金貨の代わりに使われるようになるのです。これが、お札の誕生です。

この「預かり証」を発行する両替商が、やがて銀行に「ハッテンしました。」(池上彰『見えざる手』が経済を動かす)

★**鑄型**……とかした金属を流し込む型。

★**両替商**……ある種の貨へいを他種の貨へいに替える仕事をしている人。

問一——線(1)「分業」とありますが、これはどういうことでしょうか。次の空らんに入るように本文から十四字で抜き出し、説明を完成させなさい。

《一人がすべてを製造するのではなく、十四字をすること。》

問二——線(2)「人間がなぜ豊かな生活ができるようになったか」とありますが、その理由を本文の表現を用いて三十五字以内で説明しなさい。

問三——線(3)「大昔の物々交換は、実はとても大変なことだった」とありますが、その理由を本文の表現を用いて四十字以内で説明しなさい。

問四——線(4)「金貨や銀貨」とありますが、どのような過程でお金が誕生し、金貨や銀貨が使われるようになったのですか。本文の表現を用いて八十字以内で説明しなさい。

問五——線(5)「預かり証が、金貨の代わりに使われるようになる」とありますが、その理由としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 商取引が活発になって大量の金貨や銀貨が動くようになったから。
イ 大量の金貨や銀貨では一人では持ち運べない重さになるから。
ウ 大量の金貨を運ぶときの音で、強盗に気づかれる危険があるから。
エ 落としても壊れないし、腐ることもなく長持ちするものだから。

問六 次の一文を本文に入れるとしたらどこがよいでしょうか。入れる箇所直前の五字を抜き出しなさい。

《市にいけば、物々交換したいと思っている人たちに会えます。》

問七——線(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 銀行は両替商から移り変わったものであり、お金は交換の仲立ちをするものであるが、非常時には物の方が貴重なので交換できないこともあった。

イ 古代の中国では、きれいな貝や金を簡単に手に入れることができなかつたので、漢字の成り立ちにおいて、お金に関する漢字には「貝」や「金」が使われている。

ウ ものの価格は、「需要と供給」の関係で決定するものであり、「需要」の側には「買う人」が存在し、「供給」の側には「作る人」が存在するといった分担がある。

エ 日常生活において人任せにした結果、食品についての不安が起こっており、自分の食べるものは自分で獲ったり、作ることが豊かな生活といえる。

2 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

戦争中の話である。「少年」は母親と二人で、「小父さん」「小母さん」の家を訪ねた。その家には表札も玄関もなく、通された部屋には畳もない。久しぶりに会った「小母さん」は違う人かと思われるほど、顔つきが変わってしまっていた。

小父さんのところで、何かよくないことが起こっているらしいということを、少年は、出入りの炭屋が洩らした噂話でそれとなく感じてはいた。しかし、父親も母親も、小父さん夫婦が引越したということ以外、小学生のひとり息子には何も聞かせようとはしなかった。噂話くらい父親がいやがっているものはなかった。

「小母さんたちは話があるらしい。男同士、ちょっと浜のほうをひとまわりして来ようか」

小父さんの言葉に、少年はむしろ救われた気分だった。実際、突っ伏した小母さんのそばで、こういう顔をしていたらいいのか、⁽¹⁾分からなくて困っていた。

今朝、いつもより遅い食事が終わると、父親はその場で少年に言った。

「用があるので、今日はこれからお母さんに、⁽²⁾中通りの小父さんのところへ行ってもらう。行きたかったら一緒に行ってもいい」

「行きたいです」

⁽³⁾ほとんど反射的に少年は言った。

少年の家では、この小父さんのことは、中通りの小父さんと称ばれていた。引越したあともやはり中通りの小父さんだった。

少年の父親は、自宅とは別の場所に、食品の工場を持っている。^{*}軍部への納め物も一種類ではない。小父さんは、中通りの、暖簾名も知る人には知られている乾物商の何代目とかで、父親とは学校友達なのに、まるで身内の親しさで父親と酒をつぎ合ったり、むきになって言い争いをするのを、少年は羨しいような気持ちでながめていた。

よく、少年に向かっ、兄弟がいなくてさびしいだろうという人がいる。少年は、ずっとひとりだったし、兄弟が途中でいなくなっただけでもないから、較べようがないと思う。兄弟のいないさびしさは僕にはよく分からない。でも、兄弟はいなくても、大人になって、あの小父さんのような友

達がいらないと思っている。

少年は、父親を気の小さな人とは見ていない。しかし、大胆な、勇敢な男とも思っていない。小父さんはよく気がついて、他人にも親切だけれど、お父さんには決して出来ないような思い切ったことをする人かもしれない。少年はいつからかそう思うようになっていた。少年の家での父親と小父さんの食事は、三時間も四時間も続くのが当たり前になっていた。その小父さんが、一年くらい前から少年の家に来なくなっている。

小父さんと小母さんの身の上に、何かとんでもないことが起こったらしい。そうでなければ、いくら子供がいなくてもいいからといって、こんなに窮屈な、畳も敷いてないところに小父さんたちが住むはずがない。以前、僕の誕生日に、小父さんと小母さんがお祝いに招んでくれたのは、⁽⁴⁾鷹の剥製を飾った洋間だった。鋭い眼を睜って、今にも飛び立ちそうない姿の鷹だったのに、あの中通りの家は一体どうなったのか。^{*}マントルピースの奥の壁に掛っていた^{*}油彩の裸婦の額や、シヤンデリア、硝子のケースに入った振子の金時計などが、少年の前に次々に現れては消えた。

土間を出ると、小父さんはやはり入江のほうに向かった。少年は歩いていくうちに少しずつ分かってきた。小父さんたちが今住んでいるのは、ある大きな邸の母屋に属している建物の一つらしい。物置だったのかもしれない。似たような建物がもう一つ、邸の脇にある。

縄に連ねた大根を、軒下に吊るしている家の前を通った。金網の上に開いた魚を干して、縁先に並べている家がある。⁽⁵⁾肥った猫がゆっくり歩いていく。

急にながめが開けた。

退き汐どきの入江には、砂浜がかなりひろがっていて、小さな漁船が幾艘も浜に乗り上げている。内海は穏やかで、島影に島影が重なり、遠くの島はほうと霞みながら空と溶け合っている。波は静かでも、寄せては返すたびに波打際に白いものが走って、少年には、それも生きている海の怖さとうつる。

浜への下り口で曳網を繕っている肌を灼けた老人が、和服姿の小父さんに気づくと、歯の抜けた口をもぐもぐさせながら言った。

「旦那さん。今日はずっと居なさるか。いや奥さんでもいい。あとで少し晩の魚を届けるから」

「ありがとうございます」

入江に面した古い小さな神社の前まで来た。小高い所に社があつて、松の木立に囲まれている。小父さんは石段を上がりはじめた。半ばあたりでくると向きを変え、そのまま石段に腰を下ろした。少年にも腰を下ろすよう手ですすめた。

入江が一と目で見渡せる。

波の音に、木立の風音が重なる。

★いつときして小父さんが口を切った。

「五年生だったね」

「そうです」

「今度一緒に釣りに行こう。船を仕立てるから。小父さんもここへ来て、釣りが出来るようになった。いい船頭さんがいるんだ」

「僕にも釣れますか」

「心配することはない。人間社会と同じで、向こうからかかってくれるやさしい魚がいっぱいいる」

初めて小父さんは声を出して笑った。

「海の風に吹かれて、海の上で食べる握り飯は本当にうまい」

そうだろう、と少年は思った。

暖かな陽ざしの中で沈黙が続いた。

石段の入口にある石の鳥居にとまっていた鳥が、突然鳴きながら浜のほうへ飛び去った。

「お父さんは、元気か」

さつきと同じことを、小父さんがまた訊ねる。

「はい」

少年は、前の時よりも力をこめて答える。

「お父さんは、あんたを誇りにしている。よく勉強してな。いや、勉強なんてどうでもいい。一つだけでいいから、誰にも負けないものを身につけることだ。お父さんをかなしませるなよ」

「はい」

声が少し弱くなる。

「もうすぐ中学生だな」

「はい」

「戦争はじきに終わってしまう。あんなくだらないことは、早く終わらさんといかん。中学に入ったら、小父さんが大連に連れて行ってやる。大連

90

85

80

75

70

65

60

はいいぞ。★大和ホテルに泊つて、馬車に乗って、小父さんがすっかり案内してやるから」

小父さんは、僕に話しかけているのに、僕ではない誰かに話しかけているようでもある。何だか、自分と約束しているみたいだ、とも少年は思う。

相変わらず雲ひとつない小春日である。

内海が、入江の半分が、静かにきらめいている。

明るい空がたくさんある。

何が原因なのかは僕にはよく分からないけれど、⁽⁶⁾小父さんは今、とても困っているらしいのに、そんなことは一切口にしない。恥ずかしそうでもないし、誰の悪口も言わない。言い訳もしない。ひよつとすると小父さんは、とび抜けて偉い人かもしれないし、その反対なのかもしれない。どっちにしても、そういう小父さんが僕には男らしく見える。でも、少しさびしい。

少年は耐え難くなつて、思わず、

「小父さん」

と口にしてから、しまった、と思った。

「ん？」

という感じで少年のほうを向いた小父さんに、

「大連はそんなによかったですか」

と聞き返した。ついさつきまで、思つてもいなかった言葉を口にして自分、少年はおどろいていた。

「本当の気持ちを言えば、日本に帰りたくないくらい大連が好きだった。しかしなあ、人間一人で生きているわけじゃあないから、好き勝手だけでは生きられないんだよ」

小父さんは海を見ていた。

島を見ていた。

島の向こうを見ていた。

陸にも、海にも、島にも、いろいろな人が生きている。⁽⁷⁾少年には、すぐ横にいる小父さんが、なぜか遠くの人のように感じられる一瞬があつた。空が晴れているからよけいにさびしいという日もある。少年は初めてそんな感情を知った。

120

115

110

105

100

95

★突つ伏した……急にうつぶせになった。

★軍部……軍人を中心とした勢力。

★マントルピース……洋室の壁につくりつけた装飾的な暖炉。

★油彩の裸婦……油絵の具でかかれた裸の女性。

★いつときして……少しの時間がたって。

★大連……中国・遼東半島の都市の名前。当時、日本人が多く住

み、にぎやかな都市であった。

★大和ホテル……大連にあった高級ホテルの名前。

問一

——線(1)「分からなくて困っていた。」とありますが、これは「少年」とお母さんが海辺にある小父さんの家を訪ねた場面です。時間的に同じで、この後に続く場面の最初の五字を本文から抜き出しなさい。

問二

——線(2)「中通りの小父さん」とありますが、海辺の家を訪ねる前には、小父さんの性格を「少年」はどのようにとらえていますか。それが最もよく表れている一文を抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問三

——線(3)「ほとんど反射的に少年は言った。」とありますが、なぜ「ほとんど反射的」に言ったのか。その理由を本文の表現を用いて五十文字以内で説明しなさい。

問四

——線(4)「鷹」とありますが、「鷹」をはじめとした生物を用いた次の一〜五のことわざを完成するために、□の中に入ることを後のア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 能ある鷹は□をかくす

二 かめの甲より□の功

三 とんびに□をさらわれる

四 犬も歩けば□にあたる

五 □の中のかわず

(ことば)

ア つめ

イ 井

ウ ぼう

エ 年

オ あぶらあげ

問五

——線(5)「肥った猫がゆつくり歩いている。」とありますが、この一文はどのような効果がみられますか。最もふさわしいものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「小父さんと小母さん」の身の上起こったらしいよくないことが、確実になったことを象徴する効果。

イ 「小父さんと小母さん」の、かつての立派ではなやかな家の有り様が、すでに過去のものであることを暗示する効果。

ウ 「小父さんと小母さん」の身の上起こったよくないことと対照的に、のどかな光景を象徴する効果。

エ 「小父さんと小母さん」が引越した漁村が、二人にとってさびしい場所であることを暗示する効果。

問六

——線(6)「小父さんは今、とても困っているらしい」とありますが、「少年」がそのように考える小父さんの状況について本文の表現を用いて五十文字以内で説明しなさい。

問七

——線(7)「少年には、すぐ横にいる小父さんが、なぜか遠くの人のように感じられる一瞬があった。」とありますが、「少年」がこのように感じるきっかけになったのは「小父さん」のどのような態度ですか。次の空らんに入る二十七字の言葉を本文から抜き出して答えなさい。《同じことを繰り返して訊ねたり、二十七字 ような態度。》

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「少年」は、豊かではなやかな生活をしていて「小父さん」が、以前とは異なり貧しい生活をしている姿を見て心をいためた。しかし「小父さん」は、大好きな大連に自分を連れて行き町を案内してやると楽しそうに語ったので、精神の強さに驚くとともに「小父さん」の明るい未来を感じた。

イ 「少年」は、よくないことが起こったらしい「小父さん」に久しぶりに会うが、彼は現在の生活についてははっきりと語らなかつた。そして彼の心は、海、島、さらには島の向こうを見ており、「少年」の方に向いていない気がしてさびしく感じた。

ウ 「少年」は、「小父さん」の口から父が自分のことを誇りにしていると知らされて驚いた。そして、父が自分を「小父さん」に会わせようとした本目的が分かって一層うれしく感じた。しかし、戦争がじきに終わるといふことや大連に連れていってやるといふ話は現実的でなくむなしく感じた。

エ 「少年」は、以前自分の誕生日をしてもらった「小父さんと小母さん」が困っているらしいことを考えることのできる年齢になっている。そして、自分にとって人生とは何かという問題がはじめて現実的意味を持つようになったことを感じた。